白朗著

# 遠方の友を懐かしむ

## 1954年3月8日　国際女性デー前夜

私は遠方の友を懐かしんでいる。

うららかな春3月、各国の姉妹たちが、英雄的な戦いの中で、笑顔でこの祝日を迎えているころ、私は、また、その冗漫な記憶を思い起こさずにはいられないーあの忘れがたい共に戦った日々、あの宝石のような友情よ。…もし時間があれば、分厚い本が書けそうだ。今その断片を書き留めておこうと思う。

1951年、つつじの花が北朝鮮の美しい丘を赤く染める季節に、人類共通の敵が幾度も惨敗を喫して後、なおも狂った獣のような虐殺で朝鮮民族をまるごとなきものにしようとしていたとき、国際民主女性連盟は、ヨーロッパ、アジア、アメリカ、アフリカの17か国の女性代表で組織された調査団を派遣した。調査団は満身創痍の北朝鮮に至り、アメリカと李承晩匪賊軍の前代未聞の大罪を調査した。私は幸いにもこの荘厳な仕事に参加し、さらに喜ばしいことに、この多くの外国の友と出会った。だが、この荘重な政治任務を全うした後、私は思ったものだ。私たちの友情はどうやって維持していこう？まずは高山海洋が我々の親密な交流を阻むだろう。なにより、友が帰国後に、どのような迫害を受けるか、それが最も憂慮される。なぜなら、多くの代表は、平和の敵が統治している国の出身なのだから。

別れの日の前夜、ロッド夫人ーこの方は、銀の糸のような白髪をしたカナダ人の老婦人で、調査団団長だーが私の首にかじりつき、惜別の涙を流しながら言った。

「これでお別れね。いつまたお会いできるかわからない。親愛なる中国のお友達。私は偉大な中国が大好きになりました。あなたがたの幸せが本当に羨ましい。あなたがたが平和を守れば、国家が全力で支持してくれる。私たちが平和を守ろうとすれば、手かせ足かせと牢獄から逃れることはできない！私はカナダに戻ったら、自由はないでしょうね」彼女は涙を抑えることができずに、興奮気味に、しかしきっぱりと続けた。

「ですが、どんな形であれ、束縛されればされるほど、我々の平和への思いは強くなります。私は年をとっても勇気まで衰えるなんてことは絶対にありえません。断固として戦い続けます！」

彼女の話を口火に、多くの人が心の準備と決心を語りはじめた。実際、朝鮮に行く前からすでに、このような心の準備と決心はできていたのだ。

そのとき別れて以後、私は折に触れいつも友を思っている。彼女らの決心と勇気をちゃんと信じているけれど、自由であるかが心配でたまらない。幸いにも私の心配は杞憂に終わり、この2年間、音信不通になることはなかった。私は、直接的あるいは間接的に、友の勇敢な奮闘ぶりを聞くこともあり、平和会議で顔を合わせることも何度かあった。平和と民主主義の力のおかげで、友は手かせ足かせからなんとか逃れ、鉄柵を破って出ること

ができたのだ。闘争はまだ続いている。闘争が私たちを鉄鎖のごとく強く結びつける。政治や宗教も違うし、生活スタイルも大きな違いがあるけれども、平和という問題に関しては、いつも一致している。会うたびに、狂おしいほどの喜びを感じ、私を深く深く感動させる。かの英雄の朝鮮の国土で、共に戦った短い期間に、我々は揺るぎない友情を打ち立てた。戦場での友情はかけがえのない永遠の友情である。コペンハーゲンでの出会いで、私はこうした思いを強くした。

今回の世界女性大会は、調査団中、8 人の代表が出席した（国でいえば、調査団の半分におよぶ)。再会は、もともと、誰もが予想できたことだった。それなのに、意外な出会いであったかのように、驚き喜びあった。それほど親しく熱狂的に喜びあう光景は、長年離散していた実の姉妹の突然の再会を思わせた。会場内の数えきれないほど多くの人たちが、私たちに一斉に羨望の眼差しを向けた。

大会の会場となった体育ビルの中、最初に私を見つけてくれたのはカンデラリアだった。彼女は私を見つけると、遠くから両手を広げて、かん高い声で叫びながら勇猛に突進して来た。私は、まるで狩りの獲物のようだった。すぐに彼女の腕の中にしっかりと捕えられ、ゆうに 30 秒くらいは、息ができないほどしっかりつかまえられていた。キスしたり、激しく揺さぶったり、私の名前を呼んだりして、ついで涙がこぼれでた。彼女は気持ちが落ち着いてから、ようやく誇らしげに私に言った。彼女は、キューバ女性連盟の副会長に選ばれていたのだ。

「人民が私を誤解するなんてありえない。戦争好きな人たちが迫害してもどうってことないよ」

彼女の闘いの勝利を祝って、私たちはまた、熱烈な抱擁をした。私の両頬は、赤いキスマークがいっぱいついた。

この若いキューバの女性弁護士は、火のような熱情をもっている。深紅の外套を好んで着て、ある時は長い髪を肩にたらし、ある時は昔風に髷を結っていた。小声で話すことに慣れておらず、幅広い音域で、世間話をするときも、会議のときも、いつも抑揚のある、朗々とした高い声で、美しい詩を朗読しているように話した。顔の表情も豊かで、どんなときでも、歌を聞いたら踊りだし、景色を見たら感動する、そんな、豪放にすぎ、熱狂的なエネルギーをすぐ炸裂させる人だ。それは制御不能のようだった。静かにしているときもあったが、無理しているように見えた。実は、朝鮮で一緒に働いていた時、私は彼女が好きになれなかった。わがまますぎるように思っていた。

しかし、今、私の彼女に対する印象は変わった。目の前にいる彼女は、物事を深く考えないような女性では全くない。メリメが描いた非常にエネルギッシュな人物ーカルメンのイメージが、私の目の前にあった。ただ、彼女のチャームポイントはここにあるのではない。

アメリカ帝国主義が朝鮮で行った非人道的なひどい行為に、カンデラリアは深く激しい恨みをいだいた。罪もない朝鮮の女性や子どもの受難に、悲痛な思いを更に深くした。朝鮮で、彼女はすぐ感情を動かされた。あるとき、朝鮮のホストが、私たちのために、連合空軍が朝鮮の平民を爆撃している映像を放映したことがあった。負傷した赤ん坊が、爆死した母親の乳房をつかんで泣き叫んでいるシーンになって、カンデラリアは顔を曇らせると大声で泣き始め、それをきっかけに場内の人々はみな声もなく泣いた。そういう人なの

だ。彼女は朝鮮から帰国後、ベルリンの国際民主女性連盟のビルの中で、三日三晩かけて、3、4万字にわたる調査団報告書「われわれは訴える」をスペイン語に訳しタイプして上梓した。

彼女はキューバへ戻ると、すぐに人々を集めて集会を開いた。自分の目で見たアメリカ軍の暴行と朝鮮人民の勇敢で不屈の精神を、現場にいるかのごとく人々に教えて目を開かせた。彼女の宣伝で、ラテンアメリカ 20 数か国の植民地に影響が及んだのだ。彼女の勇敢さと熱情からみて、その扇動力の大きさは、手に取るようにわかる。この間、彼女が捕まったのは一度だけではない。法廷で、彼女は弁護士として自分を弁護した。理路整然と、堂々たる弁舌であった。その鋭い饒舌さと辛らつな風刺にかかれば、狡猾で悪賢いアメリカ軍の裁判官も形無しで、手も足も出なかった。あるときなど、開廷の第一声は、「すみません、カンデラリアさん、今日は、お話はほどほどにしてくださいね。いいですか？」だった。裁判官は、怒っているようにも見えたが、明らかにお願い口調だった。当然、カンデラリアは、容赦なかった。彼女は正義と真理を心底愛していたからだ。

「この目で見たことだから良心がうずくのです。私の良心は、自分の目で見たことを尊重します。それが最も公正ですから。私を説得しようとしてもだめですよ。生ある限り、どんな力も私の真実の話を阻止することはできないのです。私は自分で見たことだけを信じます」

とカンデラリアは言った。

こういうわけで、裁判の結果、彼女は罰金刑に処せられた。ただ、彼女は弱気にならない。彼女はなんとかして罰金をきちんと支払い、そしてまた講演をした。捕まって裁判。弁護と罰金。その繰り返し。私たちが今回コペンハーゲンで会ったとき、彼女はすでに 4 回捕まっていた。

私は、この闘争の話を、モニカ・フェルトンが 2 度目に中国に来た時に聞いた。そのときから私はカンデラリアに再会したいと思っていた。彼女を思い出すと、私は、あの森厳な法廷で、傍若無人に滔々と弁舌する英雄の姿、洒落た溌剌とした態度を思い出す。だから、彼女が熱狂的な友情を示したとき、私も心からの熱情で彼女に応えた。彼女はどんなにかわいいか。私たちの友情は、突然、はかりしれないほど強くなった。

この日、集会参加者のうちでかつて朝鮮に同行した友には全員めぐり会うことができ、この非凡な友情を互いに交した。私の心は、1 日中、暖かな友愛で激しく揺れ動かされていた。私の両腕は疲れて、鼻の頭にまで口紅のあとがついた。私は同志たちと冗談を言ったものだ。

「ああ、私たちの女流作家の鼻は誰に噛みちぎられたのでしょうかね？」

会場の中では慌ただしくて落ち着いて話すことができなかったので、不満が残った。こんな多くの、得難い出会いがあったのだから、私たちの戦闘での友情と、調査団の朝鮮訪問 2 周年を記念するために、2 日目の夜、大会は欠席し、デンマークの友人ケートの家で、ささやかではあるが、大事な意義ある会をもち、胸襟を開いて話し合った。間が悪いことに、カンデラリアとアバシア（アルジェリア代表）は、発言が決まったと大会から知らせがあった。それでふたりは、ちょっと顔を見せただけですぐあたふたと行ってしまった。私たちの小集会に、情熱家がいなくなって、ほんとに寂しかったよ。

主人のケートは、美しく教養ある中年女性だ。編集の仕事をしている。主人として、盛

りだくさんの美酒やごちそうをゲストに振舞った。彼女の家計はそんなに豊かではないとモニカは私に言った。朝鮮から戻ったら、彼女は失業したのだ。――介のオブザーバーにすぎなかったのに。

彼女は勇敢だった。朝鮮調査の期間、私たちと共に奔走し、共に働いた。彼女の感情、行動は、すべて私たちの脈拍に重なって躍動していた。彼女がいかに勇敢であるかは、帰国後の事実からも明らかだ。アメリカ帝国主義の暴行を訴え、朝鮮人民の粘り強い不屈の精神を賛美し、彼女はやれることをやり尽くし、同時に、最大限の効果を得た。彼女は「客観」的に見ていただけであったのだが。

彼女はもう「客観」はしない。主催者の立場で、各人の杯に酒をついでまわり、杯を高く上げて言った。

「今日は世界で最高の友にお越しいただきました。最愛の友を心から歓迎します。私は、朝鮮に行った体験を一生忘れられません。そして私たちの戦闘の友情を忘れることはできません…」と言いながら、真実の涙があふれでた。1 杯目の杯で涙を飲み干し、2 杯目をつぎながら彼女は言った。

「私は偉大な中国を忘れることはできません。中国のありがたい支援がなかったら、私たちの任務はこんなうまくいかなかったでしょう。白朗さん、偉大な中国のため、乾杯させてくださいな」

全員が杯をあげ、みんなの視線が一斉に私の顔に集中した。私たちの祖国に対する愛と敬意がこめられていた！称賛の嵐の中、中華民族の謙虚という伝統－自己表現に慣れていない－を受け継いでいる私でさえ、愛する祖国を誇りに思わずにはいられなかった。

この時、話好きなモニカがまた私たちの仲間の話をしてくれた。65 歳のジャメーン・ハネヴァードはベルギーに帰国後、講演のときにいつも、中国が彼女に贈った青い綾織の布を服に仕立てて着ていた。中国女性の習慣をまねて、小さな帽子を後ろ頭に載せて、勇ましく壇上に立つと、まず中国が偉大で、愛すべき国だと語り、次に自分が身に着けている珍しい服について得意そうに、「これは中国の人々が私にくださったものなのよ」と話した。彼女が服を仕立てたのは、布を贈られたことを誇りに思っていることを示すだけではなく、群衆に呼びかける武器にもしたのだ。

「彼女は中国に行く前は、中国に対して疑惑を抱いていたのですよ」と、モニカは私に言った。

この話を聞いたすぐあと、私の眼前に、痩せて背が高く、背筋をぴんと伸ばした、厳格で頑固そうな大きな目をした老婦人が浮かんだ。朝鮮にいたときは、彼女は眼光鋭く、話しかけにくい感じで、人を寄せ付けない雰囲気を醸し出していた。黄土色の目をし、怒りだすと、特別怖かった。だが、半年前、私がウイーンで彼女に再会したときは、天真爛漫で親切に接してくれ、その目は、親切で情の厚い目に変わっていた。残念なことに今回彼女は来なかった。

私たちの仲間に、老婦人がもうひとりいた。それが、デンマーク代表のイーダ・バックマンで、我々の調査団の第 2 副団長だ。今回、彼女はデンマーク婦連の責任者のひとりだったから、主催者として、我々だけではなく大会に出席した姉妹たち全員を招待したので忙しくしていた。彼女は帰国した当時の心情を皆に語った。

「私が朝鮮から帰国するとき着陸する飛行機から青々とした大地が見えました。それは

子どもが抱いていた青緑色の玉のようで、たいへん美しいものでした。この玉を保護するか、それとも砕いてしまうか？この瞬間、私は誓ったのです。守ってやらなければならない。必要な闘いを進めなければ！壊そうとしている人がいるのだ！」言いながら、すぐに杯を持ち上げた。深い情あふれる目でソ連の友人であるアヴシヤンニコワ（「ソ連女性」誌編集長）を見て、

「調査任務をやり遂げる事は容易ではありませんでした。お互い誰が誰なのか全くわからないままでしたが、私たちの中に、ひとりすごい人がいたんですね。彼女は一瞬にして私たち20人をひとつにまとめました」

と言った。

「そうです。彼女は本当に我々調査団の中心人物で…」西ドイツのリリー・ヴェヒターが意見を言い終わらないうちに、アヴシヤンニコワが、口をはさんで間違いを正した。

「いや違うんです！私たちは、20の点が1つの点になるのです。真理を信じれば、絶対に戦争に勝ちます。勇敢に真実を話すことが、必ず戦いに勝つ力になります。まずみなさんの勇敢さに乾杯しましょうね」

「勇敢」という話題から始まって、私たちの思い出は、滔々と流れる揚子江のように、とどまるところを知らず2年前に遡った。

血と戦火が交差する地で、私たちは機関銃掃射にあい、炸裂弾と艦隊の砲撃にあった。しかし、粘り強く恐れずに立ち向かう朝鮮人民に大いに励まされ感化され、私たちの中に誰一人として、しり込みをしたり恐れたりする者はいなかった。この経験があったから、どのメンバーも帰国後も落ち着いて行動できたのだ－各人はそれぞれが平和のために大きな努力と犠牲を払った。今や平和の力は、世界中の善良な男性、女姓を団結させ始めており、我々もまた、共に戦場で過ごした友として、楽しく集まっているというわけだ。共に働いた期間を思い起こすと、波風がたたなかったわけでは決してなかったし、初めから親密だったわけでもなかった。私たちは、世界各地から集まった、もともとは知らない者どうしだった。信仰も様々で、意見も一致しにくかった。だから私たちは平和的につきあったこともあれば、尖鋭な論争になったこともあった。我々は常に闘いながら、徐々に一致団結していった。モニカが2度目に中国を訪問したとき、何度か私と瀋陽交流センター会議ホールの門前に行ったことがあった。彼女は調査団が出発する前の5時間にもわたる討論を思い起こし、ふっふっと笑いながら言った。

「あなた、まだ覚えている？私たちの友情はここから始まったよね－闘争が始まったときから。あの日、あなたは、ぽっちゃりしてかわいかった。おかしなことを言っていたわね。あなたが私の意見に反駁したとき、私はもうあなたが好きになったの。」

その時、私は朝鮮から帰ったばかりで、朝鮮人民の災難に話が及ぶと、悲憤を禁じ得ず、全身が震えた。アメリカ軍の暴行に対し疑問を抱くような態度には、感情が自然とほとばしってしまったのだ。私は国際活動に参加したのは初めてで、経験がなかったから。ややもすれば、すぐかっとなって、とても複雑な問題を簡単に解決しようとしがちだった。ただ、調査団の短期間の仕事で、私はこの方面では、大切なことをいろいろ学んだ。ソ連の友人アヴシヤンニコワ（これはリリーが言った「1つの点」の話）は、私にとって最高の先生だ。「焦らないで。事実は雄弁より強し。真理は永遠に反駁されない。みなさんにまず朝鮮の事実を見てもらいましょう。見終わってから、ひとつひとつの事実があれば、反対

派は全く反論できなくなり自滅するわ」と、アヴシヤンニコワは語った。

アヴシヤンニコワは調査団の主要メンバーではないが、彼女の知恵と迫力、勇敢さと無私の精神を感じ、だれもがみな、揺るぎない尊敬と信頼を寄せた。だれもが喜んで彼女の周りに集まった。調査団の中で、彼女の威信はダントツだった。

グループに分かれて調査したとき、率先して最も危険な重点爆撃地に駆け付け、勇敢に任務を遂行したのが彼女だった。ソ連防衛戦争のとき、彼女は前線で4年活動し、ファシズムのあらゆる暴行を見慣れていた。こういう理由で、朝鮮人民の災難に対しても、彼女は誰よりも心を痛めた。あるとき、彼女は涙を流しながら皆に向かって言った。

「朝鮮人民の苦難は、あのときソ連人民が受けた苦難を超えています。親愛なる友よ。ご存知のように、私たちが受けている手厚いもてなしは、みな、朝鮮人民が節約して捻出したものなのです。だから、我々が朝鮮に1日滞在すると、その分朝鮮人民が飢餓に晒されます。彼らはもろ手を挙げて我々を歓迎しているけれども、彼らに大きな負担がかかっている、そのことを考えないわけにはいかないのです」

多くの人が、シンパシーあふれる彼女の話に感動して涙した。その時以来、調査団の活動は、ますます緊張あふれるものとなり、ほとんど昼も夜も奔走し仕事していた。疲労困憊したらアヴシヤンニコワの話を思い出し、すぐに気力をふりしぼった。だから我々の任務は予定より早く終わった。

だから、アメリカ帝国主義者の侵略罪の証拠は、翼が生えたように、地球上のあちこちに伝えられる。(なぜなら私たちは朝鮮調査団の最初の国際組織だから)。自然と、暴虐な迫害がついてまわった。迫害、迫害。どれだけの友が、恥知らずな迫害を受けたことか。まずはイギリス労働党党員であるモニカ・フェルトン夫人は、反動派が彼女の朝鮮行きを突き止めるや、国家反逆罪が彼女を待っていた。彼女は朝鮮からロンドンに戻ると、すぐに政府の地位をはく奪され、彼女を絞首刑に処すべしと宣告されたのだ。しかし全世界人民の抗議とモニカの不屈の闘争が、反動派の気焔をそぎ、執行させることはなかった。モニカはスターリン国際平和の賞金を獲得したのち、再度朝鮮を訪れ、英米人捕虜を訪問した。ウイーン世界平和大会で、戦争捕虜の平和のアピールについて、客観的に全世界人民に報告したこともある。彼女は、粘り強い闘いで、西洋に光り輝く旗を打ち立て、平和を愛する西洋の人民に深く深く敬愛された。反動派は、彼女に対し、むやみに暴威をふるおうとはしなかった。というのは、彼らはすでに「迫害すればするほど真理が伝えられる」という壮絶な教訓を教えられていたからだ。しかし、反動派の陰謀のテクニックは尽きることがない。平和事業全体を、陰謀を用いて破壊している。去年の3,8国際女性デーで、全英女性大会を開催する前、モニカは、中国女性代表に電報を打ち、第1回目の盛大な英国女性大会に招いてくれたが、イギリス政府は露骨に「イギリス政府の政策により、イギリス領土で平和に関わる会議を開くことは許可しない」という理由で、中国代表に入国ビザの発行を拒否した。それで私は行くことがかなわなかった。次に、モニカが怒りと失望の中で書いた手紙を紹介する。

親愛なる白朗

あなたがイギリスに来られなくなって、私たちがどれだけ怒り、失望したかということを想像していただけると思います。私1人だけがこうなのではありません。あな

たに会いたがっている多くの人が同じです。私たちが抗議したことをきっとあなたは聞いておられることと思います。当然ですよ。私たちは抗議し続ける必要があります…

朝鮮の孤児院を訪問したときに小さな男の子があなたにしがみついてひどく泣いたことがあったでしょ。ある日、私は、友達にその話をしました。イギリス人は人前ではめったに涙を見せないのですが、この話をし終わると、みんな泣いていました。私のこんな経験の話が、立派な講演よりもっと人を感動させるのだと、彼らは言っていました。実際、私たちが社会の世論を変えていると思います。私たちが勝利に近づくと、反対勢力もより尖鋭に残酷になります。自然と私たちの立場も困難になりました。ただ、私たちは、確信に満ちて闘争しています。やるべきことをやってしまうのに時間が許せばよいのですが…

モニカに関していえば、つきあいが一番長い。だから、彼女に対する理解が一番深い。彼女の闘争の話は、この短文では書ききれない。とにかく、彼女は実際、調査団の中で、一番突出した聡明な人物だ。彼女は4歳のときから骨の結核で足を悪くして、歩くのに不自由だが、そのため、非常に怒りっぽい。仕事を始めたころは、そのようなエネルギーにみちあふれ、まるで疲れを知らないオスライオンのようだった。朝鮮から戻って後、彼女はアピールに奔走しただけではなく、朝鮮に関する分厚い本を書きあげた。上記の手紙の中で、彼女は私にこうも言っている。

5月に、私はカナダ大学で朝鮮の事情を報告することになりました。私にはほかにも計画があります…あなたと同じで、こんなに多くの活動の中で感じたことを文章に書くことは難しいと感じます。そうであっても、私はプラハでタイプライターを借りて、中国に関する本を書き続けます。

コペンハーゲンで会ったとき、私はこの本はどうか聞いた。すると彼女は、

「もうすぐできるけど、あまりよくないんです。もっと理解を深めたいので、もう一度中国に行かなければね」

と言っていた。

彼女は中国が大好きだ。中国で多くのかけがえのない物を学習した－たとえば批判と自己批判。今では気短かな性格がだいぶ直ったと、彼女は幾度となく私に語った。

懇親会で、皆が彼女の栄誉を祝福したとき、彼女は胸にきらめく金メダルに手をやり厳粛に語った。

「この栄誉は私個人の闘争で勝ち取ったものではありません。友人皆の力で勝ち取ったものです。私が勝ち取ったのはそのうちの20分の1にすぎません。」これは彼女が本心から言ったことで、空虚な謙遜では全くなかったことが見ていてわかった。

私たちの中で、こぼれるような笑みをたたえて座っているのは、寡黙なリリーである。彼女も皆から称賛される人であった。彼女についていえば、1951年10月に、調査団に参加した3人の中国代表に、突然速達が届いた。シュトゥットガルト人権保障自由同盟から

の手紙だった。リリー・ヴェヒターが、ある集会で、アメリカ軍軍事当局の差し金で、ドイツ警察に逮捕されたという。ヴェヒターはアメリカ軍軍事法廷に出廷し、自由が危険に晒されているということだった。そして、「どうか私たちを援助してください。それは、リリー・ヴェヒターが真実を話したりすばらしい平和の活動に従事したりすることを禁止するアメリカ軍の計画を打ち破ることです。リリー・ヴェヒターを守る委員会の委員になっていただけるなら、手紙をください…」と書かれていた。

もちろん、私たちはすぐに支援に立ち上がり、厳しい抗議文を発表し、さらにリリーを慰問する手紙を送った。ついにリリーは、再び自由を獲得した。ウイーン平和大会でも、コペンハーゲンの女性大会でも、英雄リリーが見られた。リリー支援のため裁判に急遽出席したというモニカは、リリーへの賛辞を惜しまなかった。

「リリーは、厳しい尋問にも、泰然として冷静な態度でしたよ。ユーモアあふれる風刺が、アメリカ軍を死ぬほど怒らせたようでした」

リリーは謙虚な微笑をうかべながら、友人たちの敬愛に対しお礼を述べた。彼女の落ち着いた態度、おっとりした豊満な顔は、やさしく善良な慈母を想起させる。ー彼女は、ふだんは素朴で実直、人と争わないが、子どもたちの平和な生活が侵害されたときは一歩も譲らず、平和を守るため自分の身を顧みない。

今回の得難い集りで、私たちの話はどんどん盛り上がった。大半の友は大会に来ることができなかった。私たちは常にその場にいない友人に思いを寄せ、彼女らのことを話すと場は活気づいた。私たちは、しょっちゅう、目の前にあるナイフとフォークでお皿をたたいて、音を伸ばして「レーディース」と聞こえるよう音をつくった。懐かしいロッド夫人。朝鮮では、ロッド夫人はいつも、喧騒の中、このようなやり方で、みんなを大笑いさせたあと、すぐ静かにさせて、仕事の連絡にみんなの耳を集中させた。

私たちは、フランスの友人であるジーグラーに思いを寄せた。彼女はもともとパリの「イブニングニュース」の編集者だった。調査団の中で、彼女と私は編集委員だったから、私たちは比較的接触する機会は多かった。彼女は非常に上品で、非常に頭が切れる。論争では、彼女の論点はいつも正確だ。その優雅で鷹揚な風格のため、人々から尊敬を集めていた。

帰国後、「イブニングニュース」は廃刊になり、彼女は失業した。だが生活が苦しくなっても彼女は消沈しなかった。彼女はフランス国内外で朝鮮の事情を話した。しかし、これは困難がつきまとった。たとえば、彼女がスイスに行ったとき、フランス政府がビザの発給を拒否した。その理由はこうだ。

「スイスに行く目的はわかっている－講演するならビザを発給しない！」

「講演はしません！」ジーグラーは真面目くさって言った。

「確かだろうな？」

「もちろんです！」彼女は鄭重に言った。反動派に信じさせるためだ。彼らは仕方なく脅し文句を言った

「もし約束を破ったら、厳重に罰せられるからな！」

「いいでしょう。私がスイスの集会で話をしているのを見た人がいれば、私はどんな罰でも甘んじて受けます」

こうして、彼女はビザを手に入れた。彼女は本当に約束を破らなかった。スイスで彼女

は講演しなかった。ただしだ。スイスの人たちは彼女の声を聞いた。彼女はもともと、自分の声を録音したテープをこっそり持ち込んでいたのだ。スイスの大集会で放送機器の横に立って、一言も話さなかった。だが、その声がジーグラーの熱情と激しい憤りの心から発せられたものであることを、スイスの人々はみんな知った。

反動派は彼女の知恵に愚弄された！

コペンハーゲンで、私はジーグラーから友愛溢れる手紙を受け取り大喜びした。彼女によると、昨年パリに仏中友好協会が作られ、この協会の仕事に忙しいということだった。手紙の中には、彼女が仕事をしている最近の写真が同封されていた。痩せた美しい顔に、思慮深い秀麗な目が輝き、目の前の原稿用紙とペン先にその視線は注がれていた。

思い出話は尽きることなく、夜もふけた。私たちはお互いに敬意を表し、祝福しあって、この意義深い集会を終えた。別れるとき、私とアヴシヤンニコワは、とりわけ、アフリカの人民民主国家の中で、平和のために活動して迫害された友人に崇高な敬意を送った。彼女らは、そのような困難な状況で、闘争を続けている。これは非凡な知恵と勇気である。アヴシヤンニコワは、力強く手を振り上げて言った。

「友よ、もっと勇敢に戦おうではないか。私たちはあなた方を支持する！」

私は遠方の友を懐かしんでいる。この 3.8 国際女性デーの前夜、彼女らは、きっと、新たな闘争の中、それぞれの祝日を迎える。私は彼女らの消息を知りたいと切に願う。

（了）